

2023年  
12月

## マナ通信



今月のマナ通信は、

- ◎10月の聖書日課：(ヨハネの福音書、詩篇)
- ◎土・日曜日の学び：(神の子イエス②)の感想です。

これらのことを話してから、イエスは目を天に向けて言われた。『父よ、時が来ました。子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。あなたは子に、すべての人を支配する権威を下さいました。それは、あなたが下さったすべての人に、子が永遠のいのちを与えるためです。永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。わたしが行うようにと、あなたが与えてくださったわざを成し遂げて、わたしは地上であなたの栄光を現しました。父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を。』(ヨハネ17:1-5)

これは、イエス様が十字架にかかれる直前にグッセマネで御父に対して祈られたものです。この祈りの中で、親密な親子の関係と、直前のイエス様の心境を知ることが出来ます。

まず始めに、子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現して下さいと祈っておられます。子の栄光とは何だろう、聖書では、初めに、神は天と地を創造されました。地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上であり、神の霊が水の上を動いていた。とあります。そして神である主は地のちりて人を形作り、その鼻にいのちの息を吹き込まれ人間が誕生したのです。

さらに、人間には自由意志と、地上の動植物を支配する権限が与えられました。しかし、人間の始祖アダムとエバは食べてはならない、食べれば「死ぬ」と神が断言したエデンの園に育てて熟れていた善悪の木の実を食べてしまいました。元来善悪は神が判断するもの、人間が神の領域を犯し神に敵対したのです。その為、人間は全て罪人となってしまい、神との交わりが絶たれエデンの園から追い出されてしまいました(しかし、善悪はその後、モーセによって神から与えられた律法によってはっきり理解出来るように神が現して下さいました)。

そこで神は人間を大変ふびんに思い、憐れんでくださり、御子イエスをインマヌエル、受肉したからだを持ってこの世に送り出されました。これは又、神の子イエスにとって苦しみ始まりであり零めの始まりでもありました。この世でイエス様は父なる神に文句を言ったことがありません。御父の考えに従順で神として、人間として生活しました。我々人間の犯した罪の回復のため、身代わりとなるため、この世に来られたイエス様に十字架の贖いが目前に迫ってました。

神は栄光に輝ける方、全ての人に崇められ、光を放つことの出来る方です。イエス様はその栄光で輝かして下さいと祈ってます。

栄光は神の特質で、被造物である人間には、無いものです。まず、神は全知全能であられることです。神には未来に対する御計画があり、天地創造前に、地上で起こることが全部計画されたものであり、これがこの世で一つ一つ成就していきます。

次に、神は偏在であられます。神は霊であるから一瞬にしてどこへでも飛んで行くことが出来ます。全ての人を平等に扱うことが出来ます。

そして次に、神は聖く、正しく、愛ある方です。そして又、罪を許さず、罰します。この様なことがお出来になり、被造物には出来ない輝きを放つのが神の栄光だと思います。イエス様は父なる神に栄光で輝かせて下さいと祈ってます。

これはまさに十字架の贖いを完結させるための、神の力、わざを父なる神に願い出ているのです。理由は受肉しているからです。十字架上では罪のないイエス様が、人間となって罪人の罪を一身にまとい死んで下さったのです。我々一人一人もそこで死んだのです。そしてイエス様に抱きかかえられて三日後にイエス様と一緒に復活したのです。神のわざが発揮されたのです。この時点から神は我々をイエス様にあるものとしてくださったのです。イエス様の御霊を頂きました。

それから、イエス様は多くの人に現れ復活を確信させます。そしてその後昇天されました。父なる神の元へ帰ったのです。見事に役目を果たしました。

そしてペンテコステの時、イエス様の約束通り聖霊が弟子たちの上に降りたのです。イエス様はこれらのことがうまく進むように祈られました。



十字架の贖いはイエス様が御父に栄光を現す為のものでした。それは十字架の贖いを信じる者は救われ、福音が与えられます。これは、神との平和です。

父なる神の願いは一人でも多くの方が神との平和を回復し、イエス様を長子として神の子として神の御ところに沿って生きることです。神は全ての人を招いておられるのです。(畑中伸之)

**あ**なたは子に、すべての人を支配する権威を下さいました。それは、あなたが下さったすべての人に、子が永遠のいのちを与えるためです。永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」(ヨハネ17:2-3)

イエス様のこの祈りは今日の私のためでもあります。ただ感謝のほかありません。しかも十字架を眼前にした大祭司としての祈りを御父の御前にささげて下さいました。

8節「あなたがわたしに下さったみことばを、わたしが彼らに与えたからです。彼らはそれを受け入れ、わたしがあなたのもとから出て来たことを本当に知り、あなたがわたしを遣わされたことを信じました。」

3節「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」

人々が、こうして御父と御子とを知る者となり、永遠のいのちを得て、とこしえまで神との交わりに歩めるように、このために十字架で死ぬことこそ、主キリストの使命であり、父なる神の栄光を現すみわざでした。

十字架で死なれたイエス様を見た百人隊長が、「この方は本当に神の子であった」(マタイ27:54、マルコ15:39、ルカ23:47)と、まさにイエス様の中に神の栄光を見たので証しをしました。

私も信仰を持たせていただいて長くなりますが、今日も新しく感動と感謝をもって証しをしたいと願っております。(福島三弥子)



**御**言葉を読んだり、説教を毎主日ごとに聞いて、50年余になります。しかしその割には信者として成長も成熟も、できていません。

22頁の「みことばを知的に覚えることではなく、みことばを信じて実行していくとき・・・私たちの霊的な糧となる」

読むだけ、聴くだけになってしまわないように、気を引き締めました。ヨハネ15章に「とどまる」という語が何度か出てきます。当たり前すぎてわかってるという感じで、読み過ぎていました。

77頁で「とどまる」と言うことを自分の努力や熱心さであると誤解するならば、かえって実りを失いかねません。まさに若い頃の私はこの努力に依存して、実りを失っていました。

家族の中には一人も信者がいないので、自分で選んで洗礼を受けたので、信仰が神様からの恵みとまで、思いが至りませんでした。振り返れば主日礼拝を守ってきたのも、全て神様からの賜物だと、感謝です。

時間があろうが、信仰がなかったら礼拝に行こうとは思わないです。遊びに旅行に音楽会にと、主の日を過ごしていたことでしょう。

改めて聖霊のお守りがあってこそ、礼拝に出席できている幸いを、かみしめています。生きている限り、主の家にとどまらせて下さい。(広瀬裕子)

**ク**リスマスになる前、草取りしながら、「私って心の汚い人間なんだなー」って少し暗い気持ちになったりしてました。

その後、水のバプテスマを受けた時に、自分の汚いものがすべて落とされ、真っ白になったようで、とてもうれしくなったのです。

それなのに、日が過ぎるにつれて、クリスマスになる前よりももっと罪や汚いものを見つけることが増えて、クリスマスになったからこそ、罪を犯したくないのにと、苦しくなりました。

確かにⅠヨハネ1:9によれば、罪を告白するなら神は赦し清めてくださる、と言います。

それでも、現実に、罪を犯す（汚いものを見つける）→告白する→清められる。間もなく、罪（汚いもの）を見つける→告白→清められるという、ループを繰り返すばかりです。それが多いのでうんざりしました。それで、何とかそこから抜けだしたいと思いました。

見れば、ロマ書の7:24-25では、「なんとみじめな」という状態から、「主イエス・キリストにゆえに感謝します」と大転換していますから、私もその秘訣を知るなら、解放されそうです。それで、ロマ書7:15-25の部分を何度も読みました。

そこに発見したのが、罪を犯したくないという思いを持つ人と、その人の中に住む罪とを分けていることです。それまでは、私=罪=悪と思ってましたから、袋小路に追い込まれた気分でもがくばかりでした。しかし、その二つを分けて考えるなら、今まで見えなかった解決の道があるように見え、目の前が少し明るくなりました。

そのころ聞いたことですが、福音書のからし種のたとえで、大きく育ったからし種の木の茂みに、カラスが飛んできて巣を作ろうとしたとき、カラスがやってくるのは避けられないとしても、巣を作らないように追い払うことはできる。しかし、私がカラスを追い払わないでいれば、カラスは簡単に巣を作ってしまう、というのです。

それを適用するならば、私の内に住みついている罪が動き出したと気づいたら、罪を犯したくない罪に従いたくないと思っている私が、追い払えばいい、つまり、拒否すればいい、と思いました。

というわけで、良くない思いが出て来たり、内なる罪が動き出したのに気づいた時に拒否するようになりました。こうすれば、おそらく、御霊様は、そのときの罪が行いにまで至らないように体において殺して下さる（8:13）と信じています。

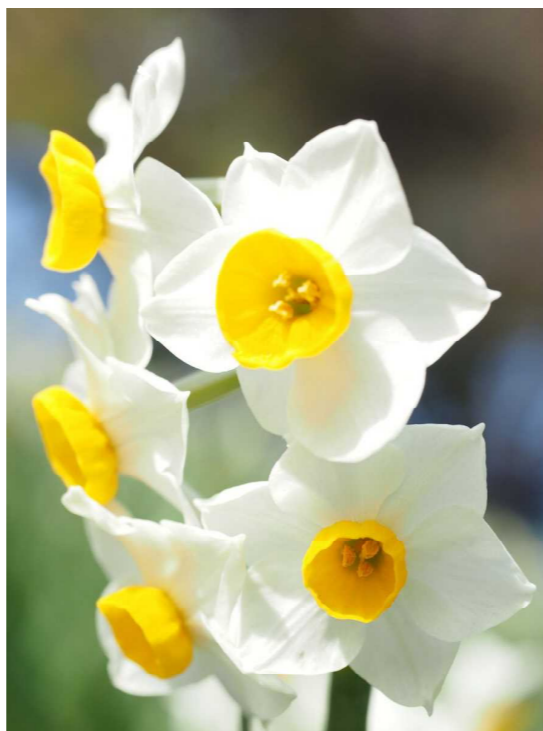
私の場合、おおざっぱにしか自分の分析をできませんでしたが、クリスマスが恵みの中で受け取ってゆくことのできる真理を、ほとんど知らなかったのも、こういうところを通るほかなかったのでしょう。

7章最後の大転換の秘訣を7:15-25に見つけることはできませんでしたが、7章初めにある死者の中からよみがえったお方と結ばれたことが秘訣であろうと思います。

そのお方と結ばれたことによって、数々の真理が自分のものになるのです。真理を自分のものにした人とみじめな人を対照的に書いてあるロマ書講解〔19「みじめな人」とは誰か（2）〕を参考にすれば、真理を受け取って歩むことがどんなに素晴らしいかがわかります。

真理を受け取った人には、当然のように大転換が起こり、7:25「主イエス・キリストのゆえに感謝します」という叫びになるのでしょう。私も実際に真理を受け取って、我がものにしてゆくつもりです。

律法は要求しこそすれ、守り行う力を与えてくれはしないことをはっきりと知りました。今、その力は私の新しい夫であるキリストから頂くことができるのですから、真理に信頼し、力を頂きながら歩んでゆきます。（高橋美枝）



**わ**たしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがますますことのないためです。人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。実際、あなたがたを殺す者がみな、自分は神に奉仕していると思う時が来ます。彼らがそういうことを行うのは、父もわたしも知らないからです。

これらのことをあなたがたに話したのは、その時が来たとき、わたしがそれについて話したことを、あなたがたが思い出すためです。わたしは初めからこれらのことを話すことはしませんでした。それはあなたがたとともにいたからです。しかし今、わたしは、わたしを遣わされた方のもとに行こうとしています。けれども、あなたがたのうちだれも、『どこに行くのですか』と尋ねません。むしろ、わたしがこれらのことを話したため、あなたがたの心は悲しみでいっぱいになっています。

しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのです。去って行か

なければ、あなたがたのところへ助け主はおいでになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところへ助け主を遣わします。その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかにさせます。罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。」（ヨハネ16:1-9）

信仰生活において、みことばを知らないならば、様々なことについて驚き、動揺し、冷静さを失うことでしょう。しかし、聖書を深く知っていくならば、多くのことに備えが与えられます。これはとても心強いことです。主イエスは、弟子たちが動揺し、つまづくことのないように、前もって語られました。

「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがますますことのないためです。」

使徒の働きを読むと、その通りのことが起こっていると気づきます。サウロはまさにその中にいた人物です。神への正義感から、キリスト者を迫害し、熱心なキリスト者ステパノの殺害にも加担したほどです。この時、これ聞いた弟子たちは驚いたに違いありません。しかし、この時に驚いておけば、実際に起こった時には「ああ、主がおっしゃっていたとおりではないか」と備えを持って臨むことができたのです。むしろ主のおことばは真実であったと信仰を確かにする機会にさえなったことでしょう。

こうして、キリスト者は恵みを受けるだけでなく、迫害を通して神の栄光を現すものなのです。そのために、私たちは様々な困難を通ることもあるのです。

また、主がこうして前もって語られたのは、たとえ弟子たちが忘れていても、思い出せるようにするためでした。それを手伝い、あらゆる助けを下さるのが「助け主」なる御霊です。私たちの「信仰生活」において、主のおことばが最善の時に示され、よき導きを受けることも沢山あります。

御霊なる主の働き、御霊は、罪についても、義についても、さばきについても神の正しい御心をこの世に対して明らかにして下さいます。大変感謝なことです。（木村邦夫）



**ヨ**ハネは答えた。「人は天から与えられるのでなければ、何も受けることができません。『私はキリストではありません。むしろ、その方の前に私は遣わされたのです』と私が言ったことは、あなたがた自身が証ししてくれます。花嫁を迎えるのは花婿です。そばに立って花婿が語ることに耳を傾けている友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。ですから、私もその喜びに満ちあふれています。あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません。」（ヨハネ3:27-30）

弟子たちは、人々がみんな後から出てきたイエスの方に行ってしまうことに嫉妬心や焦りを感じていました。今で言えばあとから出てきた芸能人やユーチューバーが似たようなことをやって、それが本家を超えてしまったような状況でしょう。普通の人には嫉妬すると思いますがヨハネは違いました。

この箇所を読むとき、私はこれまでヨハネは本当に謙遜で偉大な人だと思っていた。でもなぜこんなに謙虚になれるのか。それはヨハネが自分の役割を深く自覚できていたからだと思います。

自分はキリストではなく、その前に遣わされた者である、とはっきり自覚しており、天から与えられたもので自分は働いているという自覚もありました。それゆえの言葉であったのです。

私は、謙遜は美徳であると思ってきました。日本の文化的にもそうですからなおさらです。しかし、このヨハネの謙遜や、主に忠実なイエス様のへりくだりというのは、私の考えるものと次元が違うと思います。

神様との本当に近い関係から生まれるごく自然な状態が、ヨハネやイエス様の謙遜な姿なのかなと思います。私も聖霊様の働きを通して、日々の御言葉や祈りによって、ごく自然な状態としての謙遜が表れるなら幸いです。（永井亮子）

**わ**たしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれも闇の中にとどまることのないようにするためです。」（ヨハネ12:46）

今年も残すところ2ヶ月になりました。今までにない暑かった夏も終わり、少しずつ秋めいてきました。主なるイエス様は、光としてこの世に来てくださいました。今起こっている悲惨な戦争、暗い事件や痛ましい事故。まるで、先の見えない闇の中に佇んでいるようです。

しかし、「わたしを信じる者が、だれも闇の中にとどまることのないようにするためです。」と主なるイエス様は語りかけてくださいます。なんと感謝なことでしょう。

疑うことなく、素直に主を信じて歩ませていただきたいと願います。（外處トミ）

# 神無月 我にとっては 神在月 日々主とともに 従い歩まん

2023年10月31日

**わ**たしは山にむかって目をあげる。わが助けは、どこから来るであろうか。わが助けは、天と地を造られた主から来る。」(詩121:1-2)

天と地を造られた主がいつも私たちのことを気にかけ、助け導いてくださることに感謝します。だから恐れず、日々を大切に歩いていきたいです。(外處光歩)

**わ**たしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木にとどまっていなければ、自分では実を結ぶことができないのと同じように、あなたがたもわたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」(ヨハネ15:4-5)

私たちは主にとどまっている以上、私たちが頑張らなくても、主が良いものを与えてくださり、驚くほど豊かな実を結ばせていただけることを覚えて感謝いたします。

主にとどまることがどれほど大きな恵みであるかをより深く知ることができますように。主のみことばを慕い求め、主の愛にとどまり続ける歩みができたら幸いです。

(外處結実)



長野県 軽井沢町 雲場池の紅葉

**わ**たしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれも闇の中にとどまることのないようにするためです。だれか、わたしの言葉を聞いてそれを守らない者がいても、わたしはその人をさばきません。わたしが来たのは世をさばくためではなく、世を救うためだからです。わたしを拒み、わたしのことばを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことは、それが終わりの日にその人をさばきます。」(ヨハネ12:47-48)

私にとっては何とあわれみと恵みに満ちた御言葉でしょう。主イエス様の御言葉に全て従うことができず、キリスト者として自信の無い状態であっても、それは受け入れても実行することができない信仰の程度であることが課題なのであり、受け入れずに無視しているのでは無いため、そのことについては、主イエス様はさばかれないと言って下さっています。

このあわれみに満ちた御言葉も受け入れさせていただいて、信仰の足りなさを嘆くことから解放された思いです。

「むしろ、創造主がそれぞれに分け与えてくださった信仰の程度に従い、健全な判断をもつが良い。それは、一つの体には多くの部分があって、すべての部分が同じ働きをしないように、私たちがまた多くいるけれども、キリストを信じる者として一つであり、各々はお互いにその部分だからである。」

(ロマ12:3~5/創造主訳聖書)

信仰もおのおのの役目に応じて与えられているとのこの御言葉から、自分がどうであっても、神様に教会の一員として全て導いていただいていることの幸いに深い平安と感謝を覚えます。(外處徳昭)

**ま**ことに、まことに、あなたがたに言います。信じる者は永遠のいのちを持っています。」(ヨハネ6:47)

「53 イエスは彼らに言われた。『まことに、まことに、あなたがたに言います。人の子の肉を食べ、その血を

飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。55 わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物なのです。56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。57 生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。58 これは天から下って来たパンです。先祖が食べて、なお死んだようなものではありません。このパンを食べる者は永遠に生きます。』(ヨハネ6:53-58)

53節で、主イエスは「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。」と語られました。

これが主の晩餐(パン裂きの集会)で使われるパンやぶどう酒を指すという事実はあり得ません。主がパン裂きの集会を制定されたのは、ご自身は裏切られる夜のことであり、その時、主のからだはまだ裂かれず、血はまだ流されていませんでした。弟子たちはパンとぶどう酒にあずかったが、文字通りに主の肉を食したわけでも、その血を飲んだわけでもありませんでした。

主イエスが述べておられるのは、カルバリにおいて主が私たちのために死なれたことの価値を、信仰によって自分自身に取り入れられないかぎり、救われることは決してない、ということです。私たちは、主を信じ、受け入れ、信頼し、主を自分自身のものとしなければなりません。

54節を47節と比較すると、主の肉を食べ、その血を飲む、ということは、主を信じる、という意味であることがはっきりわかります。47節には、「わたしを信じる者は永遠のいのちを持ちます」と書かれています。54節では、主の「肉を食べ、その血を飲む者はだれでも永遠のいのちを持っている、と記されています。同一の事柄に等しいものは、互いに同一です。主の肉を食べ、その血を飲むということは、主を信じるということです。

主イエスの「肉はまことの食物」であり、その「血はまことの飲み物」です。というのは、一時的な有用性しかないこの世の食べ物や飲み物と対比をしています。信仰によって主にあずかる人は、永遠に続くいのちを受け取ります。

主と主を信じる者の間にはきわめて「親密な結びつき」が生じます。主の「肉を食べ」、その「血を飲む者」は主の「うちにとどまり」、主も「その人のうちにとどまって」くださいます。これほどの近しさや親密さはほかにあり得ません。

実際の食物を口にする時、自分の存在そのものの中に私たちはその食物を摂取します。そしてそれが私たちの一部となります。主イエスを自分の贖い主として受け入れる時、主は私たちの人生の中に入って来られ、私たちが主の中にとどまる(継続的に住む)のです。何と素晴らしいことです。

57節で、主は、ご自身とご自身を信じる者の間に存在する「密接なきずな」を、別の例で説明されました。その例とは「ご自身と父なる神との間の結びつき」です。生ける父は主イエスをこの世に遣わされた「生ける父」という表現は、「いのちの根源であられる御父」を意味します。

この世に人間として来られたイエス様は、御父によって、御父を存在の理由として生きておられました。主のご生涯は、父なる神との「この上なく親密な一致と調和」の上に成り立っていました。

主が志したのは、父なる神に占有されることでした。主はこの世に人として来られました。しかし、この世は主が「肉体をもって現れた神」であることに気づきませんでした。

主は世から誤解を受けましたが、主と御父とは1つでした。主と御父は「限りなく親密な交わり」の中におられました。

実はこれこそが、主イエスを信じる者の姿です。信者はこの世に住み、世からの誤解を受け、憎まれ、しばしば迫害を受けます。しかし、主イエスに信仰と信頼を置くゆえに、主によって生きるのです。信じる者のいのちは主のいのちと密接に結合しています。そして、このいのちは永遠にまで続くのです。

58節は前節の主のみことばを要約しているようです。主は「天から下って来たパン」です。主は父祖たちが荒野で食した「マナ」にまさるお方です。マナの有用性は一時的なものであり、この世だけのものでした。しかし、主イエスこそは、主を食するすべての者に永遠のいのちを与える神のパンなのです。何と感謝なことでしょう。(福島勲)

貴重なご感想をありがとうございました。

次回はマナ11月号の感想を12月10日頃までに福島兄弟へお寄せ下さい。(永井)